

うえ の さと こ 上 野 智 子

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文第237号
学位授与年月日	平成19年3月8日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
最終学歴	昭和54年3月 広島大学大学院文学研究科(博士課程後期)退学
学位論文題目	日本列島における海岸部地名語彙の研究
論文審査委員	(主査) 教授 小林 隆 教授 齋藤 倫明 教授 仁平 道明

論文内容の要旨

○ 構成(項以下は省略する)

第I部 個別研究

第1章 長崎県西彼杵郡福島の海岸部地名

1. 目的・方法
2. 福島の海岸部の地名語彙
3. 共有語彙の考察
4. 特有語彙の考察
5. 共有語彙と特有語彙
6. 海岸部地名の造語法
7. 福島の海岸部地名の特色
8. 漁業生活語彙の中の海岸部地名語彙

第2章 岡山県笠岡市真鍋島の海岸部地名

1. 真鍋島の海岸部地名
2. 語構造上の特色
3. 他島との比較
4. 文献に現れた海岸部地名

第3章 島根県隠岐島と高知県沖の島

——海岸部地名の比較研究・二つのオキノシマ——

1. 問題の所在

2. 海岸部地名の全容
3. 地名情報と地名意識
4. 二つのオキノシマの比較
5. 総括

第4章 北海道積丹半島の海岸部地名

1. 北海道積丹半島の立地条件
2. 海岸部地名の全容
3. 漁業に関わる地名
4. 伝説に彩られた地名
5. アイヌ語の反映

第Ⅱ部 テーマ別研究

第1章 海岸部地名の研究

1. 地名を旅する
2. 暮を追って

第2章 海岸部地名の造語法

1. 数量と地名
2. 比喻と地名

第3章 海岸部地名と色名

1. 色彩語の種類
2. 色彩語と海岸地形
3. 海岸部の色彩認定と色彩語
4. アオの行方

第4章 海岸部の人名にちなむ地名

1. 問題の所在
2. 分析の視点
3. 命名の対象
4. 人名の種類
5. 命名の理由
6. 人名と地名
7. 英語の地名

第5章 海岸部地名と海岸地形名称

1. 海岸地形の呼称に関わる地域性と普遍性
2. 岩礁を意味する方言——ネ・クリ・ハエ・セ・シ・ソネ——

第6章 海岸部地名の口語性

1. 口伝え地名
2. 接辞
3. 語
4. 文
5. 口語性

第7章 海岸部地名の命名視点と命名心理

1. 命名視点
2. 命名心理

第Ⅲ部 研究総括

第1章 地名と方言

1. 語彙の変化
2. 入道雲の呼称
3. 「旧国名+太郎」の分布傾向
4. 「旧国名+太郎」の成立と伝播
5. 方言呼称と地名
6. 渡来作物と地名
7. 方言呼称に現れる地名——入道雲の地名呼称の意味するもの

第2章 地名と伝説

1. 英雄と伝説
2. 伝説の流布
3. 歴史と伝説
4. 信仰と伝説
5. 伝説の伝播経路

第3章 地名と社会

1. 平成の大合併
2. 「四国中央市」の波紋
3. 位置を示す命名法
4. 海岸部地名のメカニズム
5. 地名の多様性

第4章 地名研究の歩み

1. 研究の流れ
2. 諸学の学問的立場
3. 『地名語彙の開く世界』
4. 最近の動向

第5章 地名の総合学の構想

1. 地名研究の問題点
2. 地名研究の枠組み

初出一覧

引用文献

資料 地名一覧

○ 要旨(第Ⅰ部・第Ⅱ部・第Ⅲ部に分けて記述する)

第Ⅰ部の「個別研究」は、調査対象地として選んだ漁業集落のうち、五つの対象地について、海岸部地

名の記述および言語学的分析を中心に、どんな特色を見出せるか、どんな問題の発見ができるかを個別に討究したものである。九州・中国・四国・北海道、各地方の島や半島を含む。

第1章の「長崎県西彼杵郡福島海岸部地名」は、本研究の出発点となった調査研究である。周囲約6.5kmの長崎県福島で、2集落8名の漁業従事者から、109地点、異語数158の地名の教示を得たが、2集落間の差異が大きく、同一地点であるにもかかわらず異なった命名がなされていることの原因を解明するために、共有語彙・特有語彙の観点から分析を行った結果、語彙量とその分布密度から、A集落のある一帯ではAの特有語彙率が高く、B集落は偏りが少なく島を全円的に利用しているという、顕著な差異が認められた。これは、両集落の島の利用法の差異、つまり漁法の異なりが要因として作用しているものと見る。また、語構造の分析から、格助詞を含む連語形式には位置・内陸地形を表す場合が多く、格助詞を含まないもの・含むものの両形式が認められるのは海岸地形を表す場合が多いという傾向が導かれた。海岸部の地名において、位置や内陸地形を用いた間接的な表現方法は造語上格助詞の存在を必要としやすいのではないかと考えられる。さらに、格助詞の前にある前部要素と後にある後部要素は、それぞれ、命名発想を直接・間接に反映する要素、海岸部の基本的認識に関わる要素と言い換えることができる。そして、2集落間の異同は、A集落に後れて、舟住まいの人々がB集落に漸次陸住まいしたという、集落の歴史の差違が、漁法の違いとして地名語彙に立ち現れたものであることを明らかにした。

第2章の「岡山県笠岡市真鍋島海岸部地名」は、他三章と異なり、個人語彙の記述である。40年の経験をもつ網漁の漁業従事者が使用する68の海岸部地名についての説明から、海岸部の地形認識に次の二つの特徴のあることがわかった。

- ①海岸部は、海岸線の凹凸に対応する、クボ(窪)とハナ(鼻)によって、まず大きく二分される。
- ②クボ(窪)とハマ(浜)、ハナ(鼻)とイシ(石)とは、それぞれ相互に共起関係を保ちながら、しかも前者が後者の上位に立つという包摂関係にある。

クボとハマは前部要素との間に別の後部要素の存在を許す後部要素で、後部要素の重層構造をもたらしている。この構造が規模の類似した他の島にも認められるのかどうかを、大分県姫島・長崎県福島との比較によって検討すると、ハナが最後部要素に立つ重層構造が共通点として帰納される。しかし、重層構造の種類は真鍋島が他二島を凌いで多く、真鍋島の特徴と言える。なお、江戸時代の寛文・貞享・元禄頃の『備中国小田郡真鍋嶋検地水帳』『同新開拜地詰帳』『耕地絵図』には、この島の小字・畑・山の名が記されており、小字名の中に海岸部地名に該当するものがある。オーダライは「大たら」、コドリザキは「かうとりさき」でわずかに相違するものもあれば、全く一致するものも少なくない。同じ地名が300年近くも保たれており、書かれた地名・史料の有効活用の可能性にも言及した。

第3章の「島根県隠岐島と高知県沖の島——海岸部地名の比較研究・二つのオキノシマ」は二つの離れた島の比較研究である。日本海側の隠岐島・太平洋側の沖の島で、それぞれ2人・3人の漁業従事者から得られた地名は、隠岐島2集落ではそれぞれまとまった量であるのに、沖の島では3集落を合わせても隠岐島の1集落に満たない地名量にとどまっている。

類似した自然条件下にある島の海岸部に認められる地名の量的差違は質的差違とどのように関連し合うのか、2島の地名を相互に比較すると、③～⑥のような成果が得られた。

- ③地形が複雑か単調か、海岸線が長いか短いかが《自然要因》が、地名の総量を大きく左右する。
- ④《自然要因》は海岸部の利用のしかた(漁法)を決定し《社会要因》、地名の質に影響を与える。
- ⑤島の歴史の新古《歴史要因》は、地名使用者の、地名に対する意識と地名に関する知識とを規定する。
- ⑥二つのオキノシマは、日本海・太平洋という、それぞれ外海に位置するという共通点を持ちながら、《自然要因》《社会要因》《歴史要因》において著しい対立を示すため、地名の量・質にわたって相反

する傾向が顕著である。

第4章の「北海道積丹半島の海岸部地名」は他三章と異なり、島ではなく、半島を対象にしており、対象範囲が広く、四つの町にわたっている。しかも、地名研究の中で北海道は特別な意味をもつ地域である。そのうち、積丹半島は東北・北陸地方からの開拓民が移り住んだところで、発音には一世の出自の名残が現在もなお色濃い。4町で4名、すべて70歳台の漁師さんに地名の教示を仰いだ。その特徴は次の3点にまとめられる。

- ⑦かつて鯨漁で賑わったこの沿岸には鯨場の親方の名・屋号を付けた地名の他に、エッチューババノサキ・カガノサキのように越中や加賀から移住してきたことを示す名があり、北海道の歴史的背景が地名の命名法に反映している。
- ⑧半島の西端と東端の岩礁の名に、類話と見られる義経伝説がアイヌの酋長の娘との交渉という同一パターンをとって語り継がれており、北海道開拓が西から始まったことを裏付けている。
- ⑨日本語名の中に混じって、ポンニマンボ・ポンマッカ（ポンは「小さい」という意味）などのアイヌ語地名が認められる。その比率は道東の知床半島に比べるとはるかに少なく、移住者の日本語名が先住民のアイヌ語名とは無関係に命名された可能性が高い。

とくに、⑨は、地図に記載される地名には認められない、北海道内部の地域差と言えよう。

第Ⅱ部の「テーマ別研究」は、25年間に私が調査してきた日本列島沿岸域の海岸部地名を中核資料として、先行研究・資料なども援用しながら、テーマごとに地名の分類を行い、言語学および文化学的な諸問題について討究を試みたものである。第Ⅰ部を本論文の基礎研究編とすれば、第Ⅱ部は応用研究編にあたる。構成は、第1章を海岸部地名研究への導入部として位置づけ、第2～6章で、計6種類、計5項目のテーマを扱う。第7章には、各テーマの底流に流れる、命名心理に関する現段階における思考の到達点をまとめた。

はじめに取り上げたテーマは造語法である。数量を表すもの・比喻を用いるものは用例数が多く、広く地名研究において普遍性の高い分野ではないかと考えられる。しかし、従来、具体的・実践的な研究はほとんどなく、あっても断片的で、造語法的な観点が意識されていない。ここでは造語発想を重視することにより、生活語彙としての海岸部地名語彙が漁業生活においてどのような意義をもっているかを、多くの事例によって明らかにする。

数量を表す地名では、和語・漢語系の対比、記載地名との比較を行い次の見解を導いた。

- ①一から九までは和語・漢語系ともに活発で、さまざまな助数詞がこれらを支えているが、十以上では概括的な数値がランダムに選ばれ、現実とは合致しない、誇張心理を反映した大きな数値が散見する。百・千・万など多いことを良しとして縁起を担ぐ習慣がこうした地名造語を助長するのであろう。
- ②数詞の分散度が不記載地名ではやや狭く、一・二・三に集中しているが、記載地名では「死」と「苦」の同音の忌避傾向により四と九が少ないながらも、おしなべて広く分散しており、著しい偏りは認められない。
- ③一・二・三までに、それぞれ和語系がかなりの比重を示しているが、細かく見ると、一では漢語系とほぼ拮抗しているのに、二・三ではいずれも和語系が漢語系を凌駕している。フタ(ツ)・ミ(ツ)だけで、不記載・記載地名ともに全体の3割以上を占め、数量地名の中核的存在である。とくに、不記載地名では四以上が少ないため、この割合が高く、4割近くまでが二・三の和語系で占められている。
- ④多いことの数量認識は漁場の画定に当たっての有効な方法とはみなしがたく、不記載地名の数の偏

りは、記載地名にありがちな数へのこだわり、思い入れから離れたところに健在する、より実際的で有用な生業地名の堅牢性を示唆していると考えられる。

また、比喩については次のような発見があった。

- ⑤総語数・異語数においても最も多いのは動物であるが、喩材(喩えとして使われる材料)数では住生活・食生活の方が動物よりも多い。食住生活では、いろいろなものがより広範囲に、動物では、身近なものが集中的に用いられる傾向にあるようだ。
- ⑥形状認識の弁別基準の中で最も多いのは丸い形状で、喩材全体の4分の1に相当する。丸い形状はどこかに角のある形状とは識別され、動物・食生活・衣生活・身体・人間活動の複数分野にわたって多くの喩材が供給されている。これに対して、三角・四角・円筒・円錐・角錐の各形状は多分野に及ぶこともなく、喩材数は全部合わせても丸い形状のそれに見合う程度である。
- ⑦弁別基準の階層化を試みると、細長・突出・垂直・水平・並列形状は、丸・三角・四角・円筒・円錐・角錐形状に比べて、より広い視野から捉えた地形認識と言えよう。とりわけ、並列形状は二つの離れた地形を連結総括する点に特徴がある。
- ⑧風・木・人・波音・波動と地形とを自由闊達に結び付けた想像力あふれる比喩が認められる。外形の特徴が直接には反映されず、風や波音など視覚以外の感覚器官に訴える比喩発想を梃子にしている。比喩の中で大勢を占める視覚認識表現に対立する、貴重な表現例と見られる。
- ⑨山地部との比較によって、海岸部における比喩は厳しさと身近さとの両方の特徴を併せ持っているものと判断される。そこには、庶民生活の実用的で明快な側面と、ことば遊びを楽しむユーモラスな側面とが融合した比喩の奥行きを観察することができる。

第2のテーマは色彩語である。古代日本語の基本的色名と考えられる赤・黒・白・青がそのまま骨格を形成しているものの、他の色に比べて青の使用例が著しく少ない点に、海岸部の地名の特質を見ることができる。赤と黒の安定した組み合わせは、語源とされる明と暗の対立概念を体現し、海岸部の地名に認められた赤と黒のほどよいバランスは、明と暗の対立概念として解釈することが可能である。海岸部地名語彙に含まれる色彩語の検討によって、古代の基本色名との整合性が帰納され、しかも青は著しい遜色を見せることが判明した。海岸地形の織り成す明暗をまずは赤と黒に弁別し、赤でも黒でもないものを白と表現すれば事足りる。したがって、海岸部の地名は、それだけ古い国語の姿を宿し続けてきたとも考えられ、わずかに存する青の地名は、比較的新しい命名になるものであろう。

第3のテーマは、同じ固有名詞である人名との関わりを問題にする。海岸部には人名を付した名が少なからず認められるからである。分析の視点として〈命名の対象〉〈人名の種類〉〈命名の理由〉の3項目を設けて検討を加えた。〈命名の対象〉となる、岩礁・凸部地形・凹部地形・その他の漁場のうち、岩礁は、漁業にとって重要な漁場であり、同時に、操船上の注意を要する危険箇所でもある。成功した人の名、失敗した人の名が刻まれやすく、もっとも例が多い。〈人名の種類〉では、人名即男性名とも思えるほどに男性名への強い傾斜が認められる。これは地名全般についての普遍的事実かもしれない。しかも、数少ない女性の名は、ほとんどが死者の名であることに注意したい。〈命名の理由〉は、推論も含め、ほぼ明らかな例について整理すると、大きく五つ(漁撈活動・事件事故・死亡・伝説・魚名)に分けられる。命名の理由にどんな項目が並ぶか、命名のメカニズムへには、固有名詞研究の魅力が秘められている。また、人名にちなむ地名が外国に多いことはすでに指摘されており、人名の「名」よりも姓が地名と綿密であることがわかる。そもそも地名と姓は切っても切れぬ関係にあるが、海岸部の地名においては、もっぱら姓名の「名」が問題であり姓は射程に入っていない。海岸部地名が庶民の側にあることの反映であろう。

第4のテーマでは、海岸部地名と海岸地形との関係に焦点を当てる。これまでの臨地調査によって、

海岸部地名には地域性を反映した多くの海岸地形名称が含まれることを確認してきた。列島沿岸上にとどのような分布傾向が描けるのか、海岸地形の種類を大別し、それぞれ内部の差異を浮き彫りにする。

海岸部の地形は、おおまかに湾入部分・突出部分・岩礁などのように分かれ、それぞれはさらに細かく、次のような下位分類が可能である。これは海上保安庁が定める分類とは異なり、用例から帰納し、私が独自に工夫した分類枠である。

湾入部分……浜・浦・窪・湾・澗・タンポ・ブー

突出部分……崎・岬・鼻・トガイ・ダツ

岩礁……島・磯・石・岩・瀬・根・曾根・磐・クリ・ビジ

湾入部分では浜の普遍性が大きく、わずかに北海道と沖縄に例外はあるものの、最も広く分布している。沖縄のヒダは浜相当の方言呼称としてきわめて特徴的、浦は北海道と沖縄を除く本土に普遍性をもつ。これと相補的に見出されるのが澗(ま)で、北に偏した分布を見せるが、南の沖縄にはブーがあり、また、西日本には窪・タンポがある。

突出部分の一般称としては、崎・鼻がほぼ対等に勢力を分けあい、数の上でも拮抗し、どこにでも出てくるといふ印象がある。トガイ・ダツは沖縄での崎・鼻にあたる呼称で、トガイとダツが、一对の組み合わせとして、崎と鼻に対応するものと考えられる。

岩礁はさらに、【1】分布域の広いもの……島・磯・石・岩・瀬 【2】分布域が狭くないもの……根・曾根・磐・クリ・ビジ、の二種類に分かれると判断し、別に節を立て「岩礁を意味する方言——ネ・クリ・ハエ・セ・シ・ソネ——」で詳細な検討を行った。ネは関東・東北・北海道積丹半島へ達し、小笠原諸島を含む、主として東日本に分布、クリは日本海側を東北から中国地方まで南北に分布、ハエはクリとわずかに重なりながら九州北西岸から瀬戸内海・四国・近畿の太平洋まで主として西日本に分布する。セはクリとハエの分布領域に加えて北から南までの範囲に見られる。以上の4語は、比較的広域に認められるが、シは四国の太平洋岸に、ソネは九州の北岸から西岸を経て沖縄までの狭い範囲にとどまっている。各語の意味内容にも差があり、2～3語を併用するところが多く、岩礁の様態(自然的要因)・漁法(人為的要因)・分布傾向を総合した比較考察が今後も必要である。

第5のテーマは、「口伝え地名」とも表現できる海岸部地名の口語性について、どんな要素が抽出できるか、接辞・語・文のレベルから整理したものである。語の占める比重が大きく、中でも名詞がその中核にある。しかも、魚介・海藻類・鳥類・風の名称が特立され、海岸部の地名語彙が漁業生活語彙の一分野に定位されることがわかる。一方、名詞以外に副詞が参画する点も見逃せない。副詞の存在は不記載地名の自在性を発揮している。擬声語・擬態語はその代表であり、地名製作時の新古にかかわらず、意味の推量が比較的容易であり、時間を越えて、命名者の命名心意を追体験できるような親しみが感じられる。口語性の極意とも言えよう。語よりも小さい要素として接辞、語よりも大きい要素として文が、それぞれ語を補強している。語に比べれば、語彙量ははなはだ貧弱であるが、副詞同様、口語性をよく反映する要素として注目される。接辞は地域性、すなわち、方言差をよく担い、文は叙述性、すなわち、わかりやすさにおいて語を凌駕しているようである。

第Ⅱ部のまとめとして「第7章 海岸部地名の命名視点と命名心理」で、整理できた命名視点は次のように多様である。【1】色(赤/黒/白/青/その他)【2】数(一・二・三…百…千・万)【3】大きさ(大/小)【4】形(丸い/長い/平たい/立っている/比喩)【5】漁獲物(魚介/海藻)【6】来歴(用途/人名/伝説)【7】目標物(島/動物/樹木/神仏/建物/山/水・川)【8】位置(東・西・南・北/風名/上・中・下)

それぞれの分析から次第に見えてきた命名心理は、現時点では、次の6点に集約できる。

第1点。色彩・数に関する簡潔な表現に反映した、命も落しかねない危険な海上での操業を安全に遂行

するために海岸部をできるだけ単純化して素早く認識しようとする心理。

第2点。多様な比喩表現は類似地形を少しでも細かく弁別し記憶しようとする内的欲求の現れで、安全と豊漁を期待するために海岸部を正確に把握し記憶しようとする心理。

第3点。身近なものに喩えることにより、海上で油断のならない労働条件下に家庭生活を営んでいるような気安さ・安心感を与えてくれる自然が身近に感じられるという心理。

第4点。人名を地名に付与して、大漁した先人の足跡を記念し、反対に不幸な目に遭った場所を警戒する、先人の経験に学びながら先人たちに守られていたいとする心理。

第5点。あらゆる危険から身を守り、豊漁を願う心理。

第6点。自然を畏れ敬う心理。命名心理の基底にある、もっとも根源的な命名心理。

第Ⅲ部の「研究総括」は、本研究の意義を求めて、地名と他の研究領域との接点を探りながら、学際的・発展的な討究課題への挑戦を試み、海岸部地名研究から見えてくるもの、今後の地名研究への展望などを総括する。第1～3章は方言・伝説・社会との関係を、第4・5章は地名研究の近い過去を振り返り、その未来の「ありたき」姿を構想した。

第1章は海岸部地名を離れ、入道雲の方言呼称に現れた旧国名の生活的意味について、江戸時代から現代までの文献・方言資料に依拠しながら、次のような結論を導き出した。

- ①「旧国名+太郎」という語形式が主流でどの方向に出るかが、呼称の冒頭部分に隣接地の旧国名で示され、どこで用いる呼称であるかの重要なマーカーとして機能している。つまり、旧国名がどの地域での呼称であるかを教えてくれる。
- ②この形式が西日本に偏在し、しかも瀬戸内海周辺域にかたまって分布する原因は、降雨量が少ない瀬戸内海式気候地域では、とくに農業において、突然の雨をもたらす入道雲に関心が強く向けられたからではないかと推測される。
- ③東日本が西日本に対して、著しい遜色を見せるのは、これらに入道雲を指し示す必然性がないためであろう。西日本に見られる雲および入道雲への意味の求心性は認めにくく、したがって雲への関心は顕著には現れていない。
- ④「旧国名+太郎」は積乱雲の擬人化呼称で、生活、とりわけ農業や漁業、塩業など、降水量に大きく左右される生業に携わる人々が、雨をもたらす積乱雲を身近に言語表象化したものと考えられる。しかし、生業の変化や異常気象が日常化しているような現代においては、もはや、その在立基盤を維持できなくなっている。

第2章は、地名と伝説との織りなす世界のおもしろさを探索しながら、臨地調査で得られた伝説を糸口に、地名伝説の含意について考察を深めようとした。各地で多くの伝説を聞き取っており、本格的な記述と分析はこれからの課題と考えている。そのきっかけとなったのは、北海道に広く分布する義経伝説である。アイヌ民族との交渉という共通点を持ちながらも日本人が進出していった時期の差違が、西の積丹半島と東の知床半島の地名伝説を大きく異ならせていることがわかった。このような英雄伝説は他にも見られることから、歴史上の著名な人物を身近に感じていたいという願望、ないしはこれにあやかりたいという庶民感覚が地名伝説の基調を成していると判断される。また、史実をうまく利用しながらも、その記録に甘んずることなく、虚構を楽しむ地名がある。奇跡を起こした神仏に関わる人物を、庶民は歴史上華々しい活躍を見せた人物とは異なる期待感をもって伝説化しているように見受けられる。見えぬものへの恐れ、過去に対する反省、自然への恭順など、科学では割り切れることのない、人の情念の軌跡を倦むことなく描述し続けるのが伝説の醍醐味かもしれない。さらに、類話の分布を辿って

いくと、海路を経路とした伝播が裏付けられるものがある。海をめぐる貴重な言語文化の形成と言えるだろう。

第3章では、地名と社会が久々に直面した大規模な地名改変、「平成の大合併」をめぐり、諸種の報道・記事を参考にしながら、私を感じたさまざまな問題の指摘を行った。また、新しい市町名に多い、位置を示す命名法を、駅名・山地部地名・海岸部地名の場合と比較することにより、次のようなあらたな知見を得た。

- ⑤方位を含む新市町村名のうち、南が全体の半分を占める。
- ⑥駅名には東西が多く、南北はその六割程度にとどまる。
- ⑦海岸部の地名には方位を示す以外に、沖陸、内外、上下、前後を示す方法があり、沖陸は海岸部に特有である。
- ⑧海岸部の地図に記載されない地名には長い形態が珍しくなく、地図に記載される地名にはない大きな特色をもつ。
- ⑨海岸部では、まとまりから細分化への段階的な空間認識が行われており、包摂関係の体系的な命名法が認められる。

地図に載らない生活のことばとしての海岸部地名には、公募制もなければ、命名者も判明しない。記録ではなく記憶が勝負の世界であり、見栄えよりもわかりやすさが優先される。行政地名には認められない、海岸部地名の生活語彙としての特徴であろう。

第4章では、この四半世紀の地名研究の歩みを地理学・民俗学・歴史学・言語学の各学問分野ごとに整理した。それぞれたゆみない歩みが刻まれていることを概観し、民俗学・歴史学・言語学で、小地名研究の重要性が個々に叫ばれていることに共感した。そして、2004年に相次いで刊行された、小著『地名語彙の開く世界』、ナフタリ・カドモン『地名学—地名の知識、法律、言語—』、吉田金彦・糸井通浩編『日本地名学を学ぶ人のために』について、紹介を兼ねて解説を試み、とくに他二著については、有益な視点、問題を感じる箇所など、海岸部地名語彙研究の立場から忌憚のない意見を述べた。研究書の相次ぐ刊行は、「平成の大合併」の相乗効果であり、地名学のこれからのさらなる進展を予感させる。

第5章は、本研究を締めくくる最終章である。まず、従前の研究全体を見渡し地名研究の問題点として、文字からの解放、地名の教育と研究について、それぞれ私見をまとめた。次に、従来の地名研究から新しい一歩を踏み出すためには、地名研究の枠組みそのものを新しく構築することから始めなければならないと考える。私の専攻分野に最も近い社会言語学と地名研究の関係について、「命名行動を言語生活研究または社会言語学としてはなじませやすい課題」(柴田武)「生活者の視点からとらえた語彙研究」(杉本妙子)という見方が定着しつつある。また、言語学と固有名詞との関係を明確化するために、固有名詞研究が疎外されてきた要因を『名前と人間』(田中克彦)によって整理した。意味論・生活語彙論的視野に立ち、文法的・語義的・含蓄的・評価的・行動的・環境的意味からなる「文化的意味」(室山敏昭)の導入が必要であろう。最後に、地名の総合学として、地名の「発生」から「成長・衰退」を経て「消滅・改変・再生」までの過程にどんな研究分野のアプローチが可能であるか、「文化学」に立脚した他分野との連携による独自の枠組みを提案する。

論文審査結果の要旨

本論文は地名語彙の一分野である海岸部地名について、その体系の記述を中心に、分布や歴史も視野

に入れながら論じたものである。

第Ⅰ部の「個別研究」は、論者がこれまで訪れた調査対象地の中から5つの漁業集落を選び、地域ごとに海岸部地名語彙について考察したものである。体系の記述および造語法の考察をもとに、各地の方言にどのような特色が見出せるかを個別に検討している。全体は4つの章からなり、長崎県西彼杵郡福島(第1章)、岡山県笠岡市真鍋島(第2章)、島根県隠岐島・高知県沖の島(第3章)、北海道積丹半島(第4章)が取り上げられている。いずれも、実地調査に基づく精密な論が展開されている。

第Ⅱ部の「テーマ別研究」は、論者の調査による日本列島沿岸域の海岸部地名を中核資料として、先行研究・資料なども援用しながら、テーマごとに地名の分類を行い、言語学および文化学的な諸問題について検討を試みたものである。第Ⅰ部を本論文の基礎研究編とすれば、第Ⅱ部は応用研究編にあたる。構成は、第1章を海岸部地名研究への導入部として位置づけ、第2～6章で、計6種類、計5項目のテーマを扱う。第7章には、各テーマの底流に流れる、命名心理に関する論者の思考の到達点をまとめている。

第Ⅲ部の「研究総括」は、本研究の意義を求めて、地名と他の研究領域との接点を探りながら、学際的・発展的な討究課題への挑戦を試み、海岸部地名研究から見えてくるもの、今後の地名研究への展望などを総括する。第1～3章は方言・伝説・社会との関係を、第4・5章は地名研究の近い過去を振り返り、その未来のあるべき姿を構想している。

地名語彙についてはこれまでも多くの研究があるものの、海岸地名という特定の分野に集中して、これほど充実した論を展開したものは初めてである。また、公の地図に載らない“不記載地名”に注目し、漁業従事者の生活語彙としての立場から海岸部地名を扱った点も注目に値する。さらに、海岸部地名語彙の研究の可能性を、さまざまな事例研究によって示してみせた点も、今後のこの分野の研究に資するところが大きい。

以上、本論文は地名語彙研究の歴史の中で重要な位置を占めるものであり、その功績は大きいと判断する。よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。